桂花一枝

桂花一枝

自序

自序

江湖夢冷かにして、素懐遣るに由なく、孤燈人定まりて、幽沈語る所なし、春は花に歌ひ、夏は月に嘯き、秋は蟲に吟し、冬は雪に哦し、我我を忘れ、悠然として閑散自適すること、ろれ幾年ぞや、此に輯録する所の新躰詩十餘篇は皆余が病間自適の作、即ち獲るに隨ひ筆に任せたるものにして、敢て大方に示すべきに非ず、されど昭代の文運に浴し、康平の餘澤に醉ふ、これ聊か

自序

涓滴の微衷を同好の士に寄する所以なり、
讀む人幸に之を諒せられよ。

明治三十五年一月

著者識るす

目次

桂花一枝目次

一　櫻井の涙……一頁
二　須磨の嵐……八頁
三　朝顔……二十頁
四　斷腸……二十二頁
五　豊太閤……二十五頁
六　花の夢……三十二頁
七　吉野山……三十五頁
八　鎌倉……四十二頁
九　蛺蝶子……四十九頁

目次

十蒙　叟……五十三頁
十一　ゆく年……六十一頁
十二　別　離……六十六頁
十三　春の樂……七十四頁
十四　菅　公……七十七頁

目次終

桂花一枝　松村蓬麻著

◎櫻井の涙

黑風ふきて黃霧みち
惡魔か夜叉か人獸か
五畿七道に横行し
天つ日かげは光なし
二千五百の年の中
歷史が語る血の涙
愁絕悲絕極まりて
いづれの世にか忘るべき。

延元元年夏五月

※

賊焔天にみなぎりて、
雲霞の如く寄せ來り
殺氣黯澹五十万
悲しや廟算齟齬なして
天誠忠を鑑みず
國の柱の楠を
折りぬ湊の川の邊に。

※

慨然紫禁を辞し去りて

西櫻井に着きぬれば
乱山青く愁こめ
ひゞく松風むせぶなる
啼く鳥聲もいとかれて
神も至誠に泣くなるか
照らす殘日影うすく
腥風涙の雨を捲く。

※

正成吾子を顧みて
恩賜の寶刀投けつゝ

肅然容を改めて
言嚴かにいひけらく
我今汝と訣れなば
今生にては復逢はじ
幼なけれども十一歳
よく吾言を辨へよ。

※

父が死後には足利の
逆威は天下を蔽ふらむ
禍福の爲めに節を枉げ

いかで家名を汚さんや
河内に歸り義を聚め
一族宗徒のあるかぎり
不俱戴天の仇をうち
天意を安むト奉れ。

※

これぞ父への孝にして
君に盡すの誠ぞや
やよ聞きわけよ正行よ
心に銘し肝に彫り

父が遺訓の一言を
決して忘るゝこと勿れ。

※

赤き心をおのが子に
分ちてかをる櫻井や
忠と孝との一徹を
日月長く照鑒す
千古にまさる親と子が
千万無量國の爲め
血ある涙の一言葉

くめや四海の人心
後の世までも行人が
盡させぬ涙灑ぎつゝ

※

乱心賊子を罵りて
正義の光を仰ぐなり
嗚呼櫻井や風薫る
嗚呼櫻井や風薫る

◎須磨の嵐

砂は白く松青く
夕日の光紅ゐに
細波瀲灩ゆらぎつゝ
泛びたゞよふ白鷗
十里の海面瑠璃のごと
是れぞ名に負ふ須磨の浦。

※

やよ事問ばん白鷗
一千年は一夢か
青山終古うつらねど
うつりかはるは人の世か
西瀟湘となぞらへて
松風村雨袖しぼる。

※

思ひ廻せば元暦の
二月の春の朝まだき
東風料峭尚寒く
殘月懸る山の端に
城樓高く笛ふきて

餘音さやかに雲に入る。

※

敵も味方も諸共に
暫しは感に堪へざりき
あはれや此の日の戰は
須磨の浦わの朝風と
散りて木の葉の舞ふがごと
四散流離の平家軍。

※

萌黄の鎧白星や

紺地の錦鮮かに
花の蕾の敦盛も
馬の歩もたど〳〵と
獨り手綱をかいくりて
渚をさしてぞ落ちて行く。

※

水烟さつと蹴立てつゝ
波にうち入る一町餘
沖なる船へと進みしを
後より東の武者一騎

鐵扇頭にふり翳し
オーイ〳〵と呼び戻す。

※

馬の頭を引廻し
互に太刀を切り結び
火花を散らして爭へど
いかで及ばん公達が
關東一の剛の者
一騎當千熊谷に。

※

馬上に引組みドット落ち
熊谷ヒラリト上に乘り
さてつく〳〵とうち見れば
翠の黛鐵漿黑く
花の顏薄化粧
年は二八の初春か。

※

流石は心恩愛の
綱にはだされたためらひて
いかに前世の緣ぞと

心弱くも思はるゝ

※

とく名乗りませ御公子
定めて由緒やおはすらん
きかせ給へや吾ために
なぞて情を知らざらん。

※

公子は下よりいひけらく
修理の太夫が三男の
無官の太夫敦盛よ

とく首うつが武夫の
情の露と知るぞかし
いざうち給へ熊谷と
西に向ひて稱念し
正眞覺悟の躰に見ゆ。

※

花の雫と滴たりて
憐れぞかをる慈悲心
勇氣にはやる熊谷も
わが子の年にひきくらべ

落つる涙は雨のごと
鎧の袖をぞしぼりける

※

きつと思案を定めつゝ
御亡き跡は直實が
必ず菩提を吊はん
ゆるさせたまへや吾罪を
うちつゝうたるは戰場の
習ひといふもむざんやな
氷の刄ふりあげて

あはれや首をうち落す。

※

曉方の城上に
妙なる笛のきこえしは
さては公子のすさびかな
風流殘れる青葉の笛
公子の御首取り添へて
平家の陣へ送りつゝ
其身はやがて世を遁る
蓮生坊こそあはれなれ。

世は滄桑くとうつろひて

＊

花は開きつ又散りつ
古寺の春風八百年

問ふ人もなき濱の邊に
王孫暮畔草青く

すぎし昔ぞ懷ばるゝ。

＊

吹きくる松風漁歌送り
古寺の鐘聲沈みつゝ

無常の憐れ身にしみて

すぎし昔ぞ懷ばるゝ

落花の春の夕まぐれ
多恨の詩人ひとりたつ。

＊

漁村の煙冷かに
月も朧ろにかすみつゝ
哀笛餘音嫋々と
去來の潮に鳴る如く
つきぬ怨は行人の

衣の袖をぞ絞りける
落花の春の夕まぐれ
血に啼き度る杜鵑。

◎朝顔

露を含みて籬邊に
ゑめる姿のうるはしく
流るゝ風に香を浮ぶ
若紫やうすみどり。

一輪二輪の花の上
幽かにうつる星の影
淡き姿のいと清く
この世の塵の外に見ゆ

※

知るか知らずや朝顔の
短かき夢の一世なる
露の命を朝の間に
たのむ心のやさしきを。

◎斷腸

雲山遠く漫々と
他郷の天を眺むれば
一縷の烟かすかなる
寒き小山は父が墓。

※

馴れし故郷をふりすてゝ
立ち出たまひしその日より
ゝ十有餘年夢のと
落つるはもろき涙のみ

※

いかに前世の惡緣ぞ
子を捨て家を思ひ置き
生きて別れの悲しきに
又ひとしほの秋の風。

※

生きて別れの悲しきに
恨み添へくる死の別れ
鐵腸茲に寸斷し

無情の涙せきあへず。

※

死出の旅路の父親は
魂魄いかに迷ふらん
異郷の月は冷かに
異郷の山は雲深し。

※

逝きし年月數ふれば
はや亡き父の三年かな
心の香花たむけつゝ

夢は墓畔を遶るなり。

※

夕陽西に春きて
無常をつぐる鐘の聲
草葉にすだく蟋蟀
聲も咽びて風さむし。

◎豐太閤

四海鼎沸又乱麻

鼓角の響き震動し
暗塵高く蹴立てつゝ
腥風慘澹吹きさけび
中原鹿を爭ふは
元龜の頃か天正か。

＊

扶桑の枝に日を捧げ
六十餘州を一丸に
うちてまるめて一呑に
莞爾と笑める猿面郎。

大野の風に草靡き
衆星北斗に共ふごと
羣雄首をひれふして
命是れ命に從へり。

＊

驚天動地の英畧は
彼が胸裏に躍りつゝ
龍吟虎嘯激昂し
風雲叱咤呼號せり。

亞細亞の山は峨々として

亞細亞の原は茫々と
萬里の眺め壯濶に
縱横驅馳やいかあらん。

燃ゆるが如き功名心
希世の偉人をゆり起し
大鵬翼を張り揚げて
雲天万里の風に搏つ。

鷄林八道靡ぎ渡り

瓦解土崩の勢に
朱明の廷を震憾し
四百餘州は手に唾しぬ。

惟敬の乞へる僞講和は
端なく激怒を飈發し
醜夷の冊書ひき裂きて
大喝國威を轟かす。

天英雄に年籍さず

※

むざんや鴻圖を懷きつゝ
百戰功を遂けずして
遠き黃泉へ赴きぬ。

※

難波入江のよしあしは
榮華の夢の二十年
覺めて邯鄲一場の
偉人の末路ぞ憐れなる。

成吉斯汗や拿破崙

※

アレキサンドル、シーザー、と
其雄畧を上下して
馬嘶と竝べて馳騁せん。

※

阿彌陀峯頭秋高く
松の嵐は颯々と
建てし巨塔のその下に
希世の偉人は眠るなり。

◎花の夢

四方の山邊は霞みつゝ
野邊の千艸は綠もえ
鳥は歌ひて蝶は舞ふ
いかにのどけき春の日よ。

※

このもかのもは花のむら
うすむらさきや紅ゐに
造化の染むる芳園は

五百重八千重とかぎりなし。

※

飄然はかなき山風に
雪か櫻か乱れ散り
みそらをかほひひら〳〵と
横に斜にふり去きる。

※

木の下陰に立ちよるは
觀花の人か愁人か
綺羅の裳裾をひるがへし

夕日まばゆく見ゆるなり。

※

落花の雪は泥となり
流るゝ水に影もあく
きのふは歌ひけふは哭き
けふのよろこびあすのうき
流轉の波はたきりにて
弘誓の舟はいづこぞや。

※

春の彌生は夢の間よ

忽ちうつる青葉山
しでのたをさの啼く聲に
あはれ悲歡を拋ちて
永き眠を覺まされぬ
常住不變を求めなむ。

◎吉野山

霞か雪かみよしのゝ
千樹の梢風かをり

てらす夕日のまばゆくも
天女の織れる雲錦や。

※

滿山靄々く春深く
鳥聲寂々く夢迷ひ
御陵の邊いとさびて
遺恨茫々く添へ來る。

※

一聲ひゞく古寺の鐘
ちり來る花に問はんかな

うつろふ世にもこの花は
五百餘春の香ぞ殘る。

※

嗚呼われ馬より下りきて
いにし昔を懷ぶれば　彼方此方をさまよひつ
無限の涙は湧くかごと。

※

妖氛みちて晝晦く
虎狼は四方に縱横し

風腥さ延元の
天下の様ぞすさまじき。

※

翻雲覆雨定めなき
亂れしその世の習とて
互に攫挈噬呑し
たぞ順逆を辨へん。

※

畏れ多くも帝には
塵の都を出で給ひ

夢路を辿りて此山へ
入り給ひしぞいたはしや。

※

頼むは獨り櫻井に
赤き心を遺してし
薫る若葉の楠よ
わゝ卿ならで誰かある。

※

朝日に輝く義のみ旗
天つ日嗣を護りつゝ

むらがる賊徒を撃ち掃ひ
大節凛然いと高し。

※

嗟、南風は力なく
四條の畷秋あれて
乱れ乱れし世の季の
逆臣賊子をいかにせん。

※

されど五十餘年間
楠家の一門この花と

君の宮居を護りしは
その餘芳こそゆかしけれ。

※

古往今來かぎりなく
年々春去り又來う
世の盛衰は夢の間か
花はちりつゝ又咲きつ。

※

吉野の山の奥深く
尋ぬる人の心にも。

いにし昔の懐ばれて
幾世の春や歌ふらん。

◎鎌倉

秋天杳々く色青く
雲海茫々く濤白く
稲村ヶ崎由井ヶ濱
風猛然と吼え怒り
西函嶺に日は落ちて

鎌倉山は霸氣高し。

＊

風雲を捲き龍驤り
海内一の金湯に
劉蹶嬴顛世をかへて
大將軍の府を開き
六十餘州を靡かしゝ
文治の昔建久の春。

＊

時めき競ふ白旗も

骨肉屠り血に叫び
あはれや三代かげもなく
鶴ヶ岡邊に落つ涙
むなしきいさをを去のぶにや
なきてぞ渡るあけ鴉。

※

狐は虎を欺きて
治世の功はありとても
滔天の罪いかにせん
九代の榮華ぞいぶかしや

極樂寺坂越え行きて
業火は燃ゆる東勝寺。

※

建武の中興はかなくも
世は足利にうつろひて
黄なる霧は日を蔽ひ
逆臣賊子雲のごと
土窖の腥風晝冥く
あないたはしや御皇子。

※

誰かは切齒扼腕し
決眥の怨忘るべき
見よ十三代二百年
或は攫みあるは嚙み
管領權を弄び
將軍の威は地に墜ちぬ。

※

忽ちうつる管領の
實權は落つ家宰の手
修羅の巷にさまよひて

肉裂け血汐ほとばしり
世は滔々と戰塵の
渦く中に葬らる。

※

きのふは興りけふ亡び
古の豪華今はうせ
將軍の府管領の門
寒けき草の蔓りて
扇ヶ谷によぶ鳥の
聲もさびしくあはれなる。

松風傳ふ古寺の鐘

※

殘りの僧に跡とへば　彌陀の功德の空しくも

陵は遷りて谷となる　滄海變じて陸となり

七百餘年夢遠し。

※

あゝこれ七百有餘年

流轉の波に包まれて

月日は移り物變はり

虎擲龍拏の跡荒れて

人間幾世の旅へしも

鶴ケの岡は神さびて

神の威德はいや高く

尙八州を鎭め給へぬ

※

◎蛺蝶子

やよ蛺蝶子〳〵

いかに汝の幸福よ

樹々の百花咲さそめぬ
野邊の千艸も萌え出でぬ
造化の神のたまひたる
のどけき春の花園よ
おのが翅を翻へしつゝ
ひら〳〵香をぞ掠め飛ぶ。
風に飛び散る花片や
柳の絮の舞ふ影に
追ひつ追はれつ飛び遊ぶ
鳴呼樂しさよ〳〵。

天地の間に生れきし
獨り得顔に春を占む
禽獸蟲魚は多けれど
造化の神の寵兒なる
花の主人ゝ君なるか。
やよ蛺蝶子〳〵
天の惠を意に任せ
憐れ無邪氣に飛び遶る。
鳴呼樂しさよ〳〵
昔は南華の夢に入り

栩々翩々と遊びたり
さても汝の不可思議よ。
汝の樂しき生涯は
又と類のあるべきか
人生いつか樂を
胡蝶の夢に結ぶべき。
さはさりながら蛺蝶よ
はかなき最後を遂ぐならば
天賦のさちを失はん。

嗟はかなきは世の習ひ
春の落花や秋の風
樂み悲み移り來て
無常の感は免れじ。
やよ蛺蝶子〳〵
天より受けたる幸福を
まもりて造化に報いてよ
ゆめ〳〵頑兒に捕はるな。

◎蒙曳

（支那周末の大哲學者莊周にして蒙の人なり漆園の小吏とある）

孔孟荀は仁義禮
楊朱が利己に墨が愛
申韓商の刑名や
恬澹冲虛の老列子。

※

公孫龍に惠子が書
孫吳が兵に蘇張の辞
甲論乙駁極みなく
懸河の辨をぞ掉ひける。

※

光芒爛たる銀漢の
百家の說は燦然と
無數の星のてる如く
時めき競ふ周の季。

※

冷然浮世を觀下ろして
醉生夢死を嘲りつ
縱横百家を罵倒せし

高邁不羈の蒙漆園。

※

仁義を以て蘧廬となし
僞善虛禮を打ち破り
蝸角の鬩を憐みて
洸洋自適の道を說く。

※

死生を合せて一元に
大虛の中に遊ばんと
大鵬翼を張り立てゝ

万里扶搖の風に摶つ。

※

恍然夢に蝶となり
浮べる生を羽に載せ
翩々翩々と飛び遊び
覺むれば蘧然と周となる。

※

古往今來涯りなく
天地の間は假の宿
茫々として白骨を

未來の世へぞ送りける。

※

日月天に懸りつゝ
河岳は下に羅りつ
春夏秋冬序をなして
陰陽消長廻るなり。

※

一盈一虛反轉し
一晦一明交代し
雲なるものは雨となり
雨なるものは雲となる

※

始めなければ終りなく
終りなければ始めなく
天籟閑々音高み
人籟寂々響きなし。

※

嘘然と吹けば雲起り
然笑へば月來る
造化の妙機を懷に

藏めて獨り眠りける。

＊

あはれや高才世に遇はず
空しく明珠を抱きつゝ
十万餘言の筆の端に
虎は嘯き龍躍る。

＊

仰けば高き南華山
眞如の月はいと皎く
無何有の宮よ澄み渡り

千万年をぞ照すらん。

◎ゆく年

涯りもあらぬ大空に
さちなき地球はかゝりつゝ
吾等をのせて駸々と
奔りてゆくや駒のごと。

＊

往古來今夢遠く
茫々として人の世を

彼より此へ送りつゝ
過ぎて歸らぬとの月日。

※

幾千万のその間
大河の水の逝く如く
滔々として流れつゝ
未來へもてゆく人の骨。

※

人生僅か五十年
天地の長きよくらぶれば

水の面なるうたかたや
草の頭に宿る露。

※

今しも消えゆく泡沫や
夢の浮世に風にふきちる露の玉
生れいで
夢の浮世をすてゝゆく。

※

來るも往くも茫として
夢路の中にさまよひつ。

何處をあてと定めなき
あゝはかなきは人の身よ。

※

蟬のもぬけのこのからだ
はかなきものとかこたじな
思想の海は廣くして
太虛の岸に光あり。

※

げにや盡きせぬ吾思想
始めなければ終りなく

終りなければ始めなく
無邊無際に亘りつゝ。

※

宇宙の車につみ載せて
めぐる月日と共に駛せ
幾億万の後の世へ
浩々として進むらん。

◎別離

無言の中に包まれて
うつらふ此世の涙をば
唯はかなくも冷かに
笑める汝のさびしさよ。

※

彼のヘラクリタス、いひけらく
萬物は皆轉化のみ
彼の釋老は說きけらく
無常變化はきはみなし。

たゞそれ汝はこの中に
寂然として生ひいでゝ
焦がるゝ胸をなでおろし
うき悲と語るなる。

※

浮世の雲は翼たれ
汝をのせてさまよひつ
忽ち來り又は去る
あなうかりける人の世や。

※

風蕭々と悲みて
易水寒し壯士の歌
あるは汨羅の岸の秋
あるは河梁の夕まぐれ。

※

巫峽の猿の啼く聲や
望帝の魂血に叫び
白雲路を埋めては
相思の怨いと深く。

※

あるは垓下の夜は更けて
四面に湧くは楚歌の聲
世を蓋ふ氣慨も力なく
美人の涙さゝへえず。

※

月天心に澄み渡り
荻花楓葉けふりつゝ
潯陽江の秋の色
微茫の中に琵琶の聲。

あるは渭城の一曲に
千里の關山夢遠く
愁の絲の長くして
卷くや征途に上る人。

※

あるは洞笙聲高み
足柄山の秋の月
松風颯と音なひて
さやかにひゞく雲の上。

青葉の影にあぐ烏も

※

世を懷ぶなる櫻井や
吉野の山の夕日かげ
落花の風に涙ちる。

※

時の古今を問はず
あゝ皆汝のあらはれて
うつゝなる世をへめぐりつ
悲秋の聲をぞ叫ぶなる。

きのふはあふてけふ離れ

※

けふあつまればあすちらむ

合離聚散定めなき

轉化の世界ぞはかなしや。

※

人間万事塞翁が

説く其馬にも似たるかな

うもうつゝある其中に

うつる禍福の夢の跡。

あゝ榮えゆく人の世も

※

死と悲といましとの

三つの色どりろれ〳〵に

寂寞をこそ描きけれ。

※

いましもあればさちもあれ

いましあければさちもなし

たゆていましのなかりせば

世のよろこびをなど知らん。

＊

あゝ苦と樂とのその境を
めぐる轉化のその車
いましの涙のせつゝも
さておもしろき浮世かな。

◎春の樂

天女の衣ひるもときて
匂ふ霞か花の雲
歌ふや金衣の聲清く
舞ふや胡蝶の羽輕し。

＊

水溶々と流れつゝ
岸べの柳綠こく
桃の花咲くその野邊に
羊や牛のむれ遊ぶ。

＊

綠は萠ゆる野邊の艸
紫匂ふすみれ花
日の脚長く風なぎて

み空に高く啼く雲雀。

※

嗚呼自然の美の崇高よ
つきぬ香風神のたまひしこの園生
とこよの春ぞ麗はしき。

※

エデンの昔懷びつゝ
あるはプラトンの美を歌ひ
あるは沂水の春の風
あるは胡蝶の夢に飛ぶ。

※

理想の光輝きて
自然の匂ふ春の色
おのが心の樂しくも
あゝとこしへに遊ばなん。

◎菅公

古今のひろき其間
無數の人は骨朽ちて

うつろふ時のきゑゆけど
唯賢哲の其心
無窮の歴史に光り殘る。

※

攝關の權重くして
獨り時めく藤原の
其專横を抑へんと
大御心をつくされし
宇多の帝のかしこくも

※

文章博士のうが中より
道眞卿を擢でゝ
未來の望をこの卿に
深くも寄せて國の爲め
思ひ給ふぞ有難き。

※

希世の知遇に感じては
いでや立たゞん君の爲め
万卷の書物胸に秘め
古今の成敗眼にさらし

時こそ來れ今はたゞ。

※

蛟龍雲を得たるかな
帝の命かしこみて
敦仁皇子をもり立てゝ
年少氣鋭の時平と
廟堂の上に並び立つ。

※

流るゝ水のその如く
萬機の裁決立ちところ

輿望をひとり身に負ひて
四海の内を治めける
げに絶世の才とする。

※

紫匂ふ うす霞
九重ふかくたちこめて
千代も八千代も榮ゆべく
人々歌ひ悅びし
寛平昌泰御代の春。

※

榮え衰へ盈てば虧け
進み退くこれ定理
榮華の極み恐ろしや
三たび辞表を捧げしも
いかでゆるさん君の命

※

水魚の契ふかゝりし
君と臣との其間
いつしかへだつ讒姦の
蜜より甘きその舌に

却て剣の心あり。

※

延喜元年春正月
忽ち下る詔
西のはてなる筑紫へと
流れの身とはなりにける
たゞ柵となりて止めん

※

法皇之を聞てし召し
驚き給ひ御身にて

南殿に入りて說かなんと
赴き給ひしかひもなく
大内の門鎖されぬ。

※

至尊の身にて終日も
西の御門にたちませど
黑雲深く日を蔽ひ
無數の惡魔むらがりて
救ひ解くべき術ぞなき。

※

悲しき風はふきすさび
涙の雨はふりしきり
きのふの榮華今きえて
父子兄弟もちり〳〵に
五處に離るゝうき苦

※

都の空を顧みて
一足もぞり又進み
君を思ふの堪へやらで
夢路を辿りさすらひぬ

心の中こそ哀れなれ。

※

配所の雨に夜は冷えて
配所の風に秋荒れて
破壁に咽ぶ蟲の音や
あるは月光いと清く
てらすが中に物思ふ。

※

思へば悲し去年の秋
清涼殿の夜半の宴

秋思の詩篇賦せし時
帝の御恩身にあまり
下し賜ひし此御衣。

※

幾夜ねざめのその中も
餘香を拜し泣く〳〵も
忘るゝひまのなきものを
あゝ枉罪のはれゆきて
一たび都に還らなん。

※

三とせの旅のうき思
病みてやつれし吾姿
都の空のあこがれて
あゝ枉罪のはれゆきて
一たび都に還らなん。

※

年々雁は歸れども
我は何れの日なるぞや
浮き漂へる身にしあれど
あゝ枉罪のはれゆきて

一たび都に還らなん。

※

天枉罪を霽さずや
天吾忠を鑑むや
あゝ吾禱る眞心を
あゝ吾禱る眞心を
きこし給へや天つ神。

※

楚臣の憂かくやある
賈生の心かくもがな

あゝ一片のその孤忠
或は吟じ又歌ふ
我絶代の白樂天

※

悲しや延喜三年の
二月の二十有五日
黄泉の客とはなられけり
凄烟冷雨いとさびし
筑紫の國の太宰の府。

※

あゝ明月は雲蔽ひ
あゝ芳蘭は風碎き
鴟鴞は高く翱翔し
鸞鳳あはれ地に墜ちぬ
思へばいたはし公の運。

※

彼の時平は何者ぞ
彼の定國は何者ぞ
光菅根等何者ぞ
見よや彼等の末運を

あはれはかなきものぞかし。

※

賢人君子に敵はなく
あへなく枉罪はれゆきて
北野の社嚴かに
天滿威德天神と
祀られ給ふ公の靈

※

榮枯盛衰定めなく
世は年々にうつろへど

公の威德はいや高く
至誠の光あらはれて
學びの道の神として

※

都も鄙も遠近も
雲の上人も賤の女も
老も稚も皆共に
千代万代の末かけて
仰きまつらぬものぞなき。

※

ひまゆく月日に關守なく
公のゆきにし其日より
はや千年ふく東風の色
かをる梅花の香は高み
人の心のゆかしくも
歌ひ祭れるけふ樂し。

桂花一枝終

明治卅五年四月廿四日印刷
仝　月　日發行

定價貳拾五錢

著作者　長野縣下伊那郡松尾村　松村正一
發行者　東京市淺草區諏訪町廿八番地　渥美爲亮
印刷者　仝市仝區田町一丁目十六番地　山田勘次郎
印刷所　仝　田所町活版所
發行所　日本橋區本銀町三丁目十四番地　大洋堂　大塚周吉
特約販賣所　信州飯田　西澤飯田支店

不許複製

●誤　○正

(7)四行目　乱心ハ……乱臣。

(20)三行目　杜鵑ハ……杜鵑。

(22)八行目　で十有餘年夢のと　ハ……十有餘年夢のごと。

(29)三行目　震憾し　ハ……震撼し。

(30)一行目　年籍ハ……年藉。

(38)五行目　攫拏ハ……攫拏。

(55)一行目　懸河の辨をぞ　ハ……懸河の辯をぞ。

(57)一行目　風に摶つ　ハ……風に搏つ。

石田憐仙記

y.d

一夕氏の詩集を繙く

折しも眞如の月はいと皎く

無何有の宮よ澄み渡り

常住不変を訓きが如し

いでや我も氏にぶらはんみち

石田憐仙記

y.C